

2005 環太平洋国際化学会議
《PACIFICHEM 2005》

1979年4月1日～6日、ハワイ・ホノルルにおいて日本化学会創立100周年記念事業の一環として日米化学合同年会(The ACS/CSJ Chemical Congress)が開催され、研究発表4,800件(内日本1,800件)、参加者8,300名(内日本3,700名)を数え多大な成功をおさめた。

このとき芽生えた日米化学会の友好のきずなを主軸として、汎太平洋地域の学術振興と国際交流のための会議開催へと発展し、1984年12月16日(日)～21日(金)に第1回の1984環太平洋国際化学会議(The 1984 International Chemical Congress of Pacific Basin Societies)がホノルルにおいて開催されることが合意された。1995年開催の第3回では研究発表数が6,000件を越え、この件数は学術国際会議として記録的なものとなった。

開催年	専門分野数	シンポジウム数	研究発表数	参加登録者数
1984(第1回)	10	66	2,660(内日本1,100)	3,870(内日本1,750)
1989(第2回)	10	97	4,400(内日本1,830)	7,570(内日本3,580)
1995(第3回)	10	146	6,380(内日本2,940)	7,330(内日本3,110)
2000(第4回)	10	180	8,774(内日本4,616)	8,963(内日本4,773)

今回の第5回環太平洋国際化学会議は、本年12月15日(木)～20日(火)、同じくホノルルにおいて開催されるが、4月に発表申込みアブストラクトをオンラインで受け付けたところ、約11,500件という記録的多数の応募があった。

主催はアメリカ化学会、カナダ化学会、日本化学会およびオーストラリア化学会、ニュージーランド化学会その他、今回より韓国化学会が主催学会に加わり6カ国となった。この他太平洋を含む約10の化学会がOfficial Participating Organizationとして参加する。

今回は日本化学会がホスト学会で、村井眞二阪大名誉教授(現JST)が全体の組織委員長を務める。また、プログラム委員長には巽 和行教授(名大)が担務しており、日本から国際組織委委員として、岩澤康裕教授(東大)(国内実行委員長)、澤本光男教授(京大)、太田暉人(本会常務理事)が代表として参画し、運営に当たっている。

Scientific Programは、Symposium Listに掲載の通り、11分野に分かれた約224のシンポジウムから成り立っている。発表される論文の数は日本から約5,700件、全体で前述の通り11,500件の規模となっている。これら発表はシェラトンワイキキ、ヒルトンハワイアンビレッジをはじめ8つのホテルにて行われる。

開会式は15日の夜開催され、それに引き続きカーボンナノチューブの開発で知られる飯島澄男教授(名城大)によるPacifichem Plenary Lectureが“Seeing is Believing”と題しておこなわれる。また、約50社による展示会も16日～18日の3日間予定されており、多くの来場者が予想されている。

一般行事としては、このほか学生の優れたポスターを顕彰する学生ポスター賞選考会(16日)、18日表彰(昼食会にて表彰)なども予定されている。